

| | |
|---------|---|
| 氏 名 | 江 木 盛 時 |
| 授与した学位 | 博 士 |
| 専攻分野の名称 | 医 学 |
| 学位授与番号 | 博甲第 4075 号 |
| 学位授与の日付 | 平成22年 3月25日 |
| 学位授与の要件 | 医歯薬学総合研究科生体制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当) |
| 学位論文題目 | Non-overt disseminated intravascular coagulation scoring for critically ill patients: The impact of antithrombin levels (集中治療患者におけるNon-Overt DICスコアの評価： アンチトロンビンIII 活性値の影響) |
| 論文審査委員 | 教授 氏家 良人 教授 小熊 恵二 准教授 児玉 順一 |

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

国際凝固線溶学会は、顕性 DIC の発生を早期に予想する非顕性 DIC スコアを提唱した。しかし、その有用性およびアンチトロンビン III 活性値(AT)の項目を使用するか否かを評価した研究は存在しない。

本研究は非顕性 DIC スコアにより、患者死亡および厚生省基準(J-DIC)と国際凝固線溶学会基準(O-DIC)による2つの顕性 DIC の発生を早期に予想できるかを、AT の項目の使用の有無に分けて検討することを目的に行われた。対象患者は、岡山大学病院集中治療部に 2005-2006 年に 48 時間以上入室した 364 名とした。

AT の項目を使用した非顕性 DIC は、使用しなかった場合と比較して、ICU 死亡を有意に早期に予想した (6.8 日前 vs. 5.4 日前, $p = 0.022$)。ICU 入室中に顕性 DIC を発症した患者群において、AT の項目を使用した非顕性 DIC は、使用しなかった場合と比較して、顕性 DIC の発症を有意に早期に予想した (O-DIC; 1.3 日前 vs. 0.1 日前, $p < 0.0001$, J-DIC; 2.5 日前 vs. 2.0 日前, $p = 0.02$)。

非顕性 DIC スコアを使用することで、集中治療患者の中で死亡や重症化の危険が高い患者の予想が可能である。非顕性 DIC のスコア化を行う際、AT の項目を使用することでより早期に診断が行われ、早期に治療を開始できる事が示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

国際凝固線溶学会 (ISTH) が提唱した非顕性 DIC (non-overt DIC) 状態を DIC の前駆段階と考え、その non-overt DIC 診断スコアの有用性を検討した研究である。本研究においては、1) non-overt DIC スコアの ICU 死亡に関する予測能、2) non-overt DIC スコアの overt-DIC 発生に関する予測能、3) AT-III 活性値の項目を使用することによる予測能の変化、の 3 点を検討している。

研究結果は、non-overt DIC と診断された患者の死亡率は診断されなかった患者と比較して有意に高く、予後予測能と関係していた。また、ICU 入室後に overt-DIC に陥った患者のすべてが、non-overt DIC であると診断されていた。そして、non-overt DIC スコアを使用することで、DIC が顕性化する前に DIC 発症の診断が可能となるが、AT-III 値を加えることにより、より早期に overt-DIC の発症を診断できた。これらの結果は、non-overt DIC スコアの DIC 発症の早期診断の有用性を示し、とくに、AT-III 値の使用が更なる早期診断が可能となることを初めて示した研究であり、臨床的意義が高い。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。